

目的 日本古代の位冠制において、「うず」は特殊な位置を占めている。位冠制における「うず」の主体は金鳥襲のものであるが、その起源とせよ、中国あるいは朝鮮よりの伝来説、日本古来の風習説などがある。本研究では、この位冠制における「うず」の意味と、その拠つてきた所を中心に追究する。

方法 今日までの「うず」に関する研究者・論文は目玉通る二とを挙げておくと、『古事記』『日本書紀』『風土記』『万葉集』などの文献を中心として、折口信夫・和歌森太郎等の民俗学的研究を参考として、「うず」と古代の人々のかゝりへの等しさを明らかにした。更に、中国、朝鮮との関係を見るために、唐代までの中国の正史及び『三國史記』を参考として、古代朝鮮語と日本語とのかゝりにも留意しながら考察した。

結論 『古事記』『日本書紀』によれば、古来日本では、自然の植物を頭飾にする風習があった。それらは、「うず」・「かすら」と称されていたのであるが、「うず」は頭襲に「さす」ものであるのに対し、「かすら」は、「かける」ものである点で、楚い方が要る。「かすら」については、既に「襲—その楚いの意味—」（学習院女短大紀要XXI）で明らかにしたのであるが、「うず」も「かすら」と同様に、植物の活霊輸入を信じた人々の願いと、神々の依り代としての草木楚身の意味をもつものである。これらの弥生時代以来の風習と、古墳時代以降の胡服の風習が融合して、位冠制における「うず」が成立したと考えられる。